

ニューズレター第2号をお届けします。第2号からは、毎年の活動に関する記事を中心に色々なことのお知らせをしていきたいと思っております。

事務局からのお知らせ

(1) 事務局の移転について

学会事務局は、1988年以来筑波大学（文芸・言語学系）に置かれていましたが、今年度から東京都立大学に移ることになりました。6年間に渡って事務局の仕事をして下さった筑波大学の古川直世・青木三郎の両編集委員及びお手伝い下さった筑波大学の学生・院生の皆さん、どうもご苦勞様でした。東京都立大学では、石野好一編集委員にお世話をかけることとなります。新事務局の住所と電話番号は以下の通りです。

〒192-03 八王子市南大沢1の1 東京都立大学人文学部仏文学専攻内
日本フランス語学会事務局
Tel 0426-77-2208

(2) 例会案内用の葉書の送り先変更について

事務分担の一貫として、例会案内の印刷・発送業務は事務局とは切り離し、1994年度末まで青山学院大学で行うことになりました。ただし、例会案内用の宛先を書いた郵便葉書は、上記の新事務局（東京都立大学）の方へお送り下さい。

1994年1月から郵便料金が値上げされましたが、既に事務局で受け取っている葉書については、差額は学会費で負担することになりました。

(3) 学会費の値上げについて

お金の話で恐縮ですが、当学会では、今年度から学会費を3,000円から4,000円に値上げすることになりました。現在のところは何とか繰越金などでしのいでいますが、会の規模も少しずつ大きくなり事務作業も増えてきましたので、今後はどうしてもアルバイトなどにかかる費用も増えていくことと思われまます。また好むと好まざるとに関わらず、印刷形態が電算写植へ移行しつつあり、これも経費アップになる可能性もあります。これまでの学会費の経過を少し振り返ってみますと、1967-1971年<1,000円>、1973-75年<2,000円>、1976-1987年<2,500円>、1988-1993年<3,000円>となっていて、この規模の学会としては驚異的ともいえる低い学会費で長年やってきました。これもひとえに、事務局となった大学の編集委員の方々の犠牲的精神と、当該大学の大学院生などの協力があってのことでしたが、いつまでもそういうやり方でやっていく訳にはいかないのは明らかです。また、『フランス語学研究』をさらに充実させていくためにも、経済的な裏付けが必要です。そのためにも、今回の1,000円の値上げを理解して頂きますようお願い致します。もちろん、編集委員会では語学プロパーでない方々も含め総ての学会員の皆様に役立つような活動の企画と、機関誌の充実をさらに目指していくつもりです。

(4) 学会費の納入方法について

学会費の納入については仏文学会春期大会の会場のフランス語学会受付けでお払い頂くか、郵便振替でお願いします。事情により銀行振込はなさないようにお願いします。また、『フ

『フランス語学研究』のバックナンバー購入ご希望の方は、フランス図書が取扱い業者になっていきますので、そちらへお問い合わせ下さい。念のため、フランス図書の住所と電話番号を記しておきます。(〒160 東京都新宿区西新宿1-12-9 フランス図書 Tel<03>-3346-0396)

(5) 国内紀要・雑誌論文寄贈のお願い

『フランス語学研究』に国内紀要・雑誌論文目録欄を設けています。フランス語研究関係の論文で、事務局に寄贈して頂いた物を載せていますので、関係論文をお書きになった場合は、是非事務局まで一部ご寄贈下さい。この欄を充実させ、ミニデータバンク的なものにしていきたいと考えています。

(6) 編集委員の交替について

1993年度は倉方秀憲氏が辞任し、新たに三藤博（大阪外国語大学）、藤村逸子（名古屋大学）の両氏が編集委員に加わるようになった。

1994年度は練尾毅氏が辞任し、新たに泉邦寿、川口順二の両氏が編集委員として 復帰することになった。

なお、1993年度の『フランス語学研究』編集責任者は大久保伸子編集委員が務めた。1994年度の編集責任者は藤田知子編集委員。

(7) 投稿について

『フランス語学研究』では、論文その他の原稿を募集しています。詳しい投稿規定は『フランス語学研究』の表紙の裏にあります。投稿を希望なさる方は11月30日までに事務局に原稿をお送り下さるか、お近くに編集委員がいる場合は11月30日までに編集委員にお渡し下さい。前もって投稿予定を事務局まで葉書などでお知らせ頂ければ助かります。また、これは義務的ではありませんが、多くの人の意見を聞いてよりよい研究を投稿して頂くためにも、投稿を希望される方は先ず例会で発表されることをお勧め致します。そうすることで、投稿後の査読と書き直しの段階の手間もかなり減らすことが出来るのではないかと思います。論評や語法ノート、新刊紹介にも投稿して頂いて結構ですが、調節する必要がありますので、9月末頃までに事務局まで御一報下さい。

また、論評や新刊紹介で取り上げて欲しい論文や本がありましたら、同じく事務局まで5月末までに葉書でお知らせ下さい。

例会（予定）案内

6月以降の例会の予定は以下のようになっています。（変更の可能性もあります。タイトルも仮題です。）会場と時間は、10月以外は上智大学 3時～6時です。

6月11日（土）：特別例会予定（要確認） Nicolas RUWET（題未定）

6月25日（土）：杉山利恵子（明治大学） 代名動詞について

三藤 博（大阪外国語大学） se moyen / se neutreについて

7月9日（土）：パネルディスカッション「比較と程度表現について」

川口順二（慶応大学）、石野好一（東京都立大学）、荒井文雄（京都産業大学）

9月24日（土）：住井清高（筑波大学院生）習慣文について

藤田知子（神田外語大学） tantについて

10月29日（土） 京都大学 時間未定

小熊和郎（西南学院大学）強調を表す tout

平塚 徹（京都産業大学）副詞句の機能

11月26日（土）：市川雅己（熊本大学） venir deについて

鳥居正文（青山学院大学）モダリティーについて

12月10日（土）：青木三郎（筑波大学）態について
藤村逸子（名古屋大学）態について

なお、例会の案内は会員の方から事務局にお渡し頂く葉書だけでなく、できるだけ『月刊言語』『ふらんす』にも案内を掲載していますので、御参照下さい。

1995年度の例会発表者を募集しています。希望者はお近くの編集委員、または事務局までお申し出下さい。

運営・企画担当委員より

企画・運営担当は事務局が一括して担っていた学会業務を少しずつ分担していく方針を受けて発足しました。現在は関東3名（石野・古石・藤田）、関西2名（東郷・春木）、計5名の編集委員によって構成されており、この6月にメンバーの一部が交替する予定です。

企画・運営のもっとも重要な仕事は文字通り例会やシンポジウムの企画と運営です。例会は年8回開かれています。また春の仏文学会の折りにはシンポジウムを企画しています。1992年度は「テキストと言語理論」（関東が企画）、昨年度は「現代フランス言語学の潮流」（関西）をテーマとして取り上げ、通常の例会では扱いにくい広い視野に立った問題提起と議論を展開し、いずれも好評を得ることが出来ました。（本年度は「変動の中のフランス語—社会・歴史・教育」（関東）の予定。）また特別例会もフランス人研究者の来日に応じて随時開いています。昨年度は5月にB.POTTIER教授、9月にG.KLEIBER教授、本年3月にD.PAILLARD教授を迎え講演して頂きました。また、上智大学、筑波大学のご協力により、日本人研究者も発表して3教授を囲む密度の濃いセミナーを開くこともできました。本年度も4月にR. & B.-N. GRUNIG教授夫妻の講演があり、また6月にはN.RUWET教授の特別講演を予定しています。

各々の発表がそのテーマの専門家でなくても理解でき議論に参加できること、また、発表のテーマが会員諸氏の広範な関心に答えるべく十分な多様性を持っていること、発表者も若い方・中堅・ベテランと幅広い世代にまたがっていること、そして最終的には事務局及びその年度の編集責任者と力を合わせて例会の成果を『フランス語学研究』に反映させていくことが目標です。シンポジウムやパネルディスカッションの企画に対するご提案やご意見がありましたら是非お知らせ下さい。例会発表ご希望の方もなるべく早めにご連絡下さい。今後とも例会が楽しい雰囲気が開かれ、情報交換と議論の場としてより良く機能するように工夫していきたいと思えます。会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。（藤田知子）

編集責任者より

編集責任者というのは、簡単に言えば『フランス語学研究』の原稿を集めて印刷所に持っていく役割なのではないかと思ひ、1年前に気安く引き受けました。実際に仕事を始めてみると、見えていたのは氷山の一角であって、その下に多種多様な準備段階が隠れていたことに気がつきました。まず、毎月の例会発表には必ず出席し、発表者とその研究内容を把握しなければなりません。こうすることで、学会の全体の動向や研究者、研究分野の様子が分かるようになってきます。例会発表後、発表者やその他の人と色々な話をするのは楽しみであると同時にとても勉強になることでした。

このようにして、11月の末に投稿原稿が集まってきてからが、編集責任者の表立った仕事の始まりです。個々の原稿の査読は査読者に任せる一方で、全ての原稿に目を通し、その号全体がどうなるかを考えます。普段、自分の狭い専門分野にのみ閉じ込もって、なかなか他の分野の勉強に手を伸ばせない私にとっては良い体験だったと思ひます。

編集責任者が大活躍するのは査読会議から割付を経て、印刷所に入稿するまでの期間でしょう。特に最終原稿の締切日近くになると、毎晩寝る前には揃った原稿を数えてはニンマリし（

守銭奴が毎晩お金を勘定する心境とはこういうものなのでしょうか)、届かない原稿のことを心配しながら翌日に期すという毎日でした。締切日ともなると朝から夕方まで、速達やらレタックス(電子郵便)やらが何回となく届き、郵便屋さんにもすっかり覚えられてしまったようでした。このようにしてできあがった28号ですが、いかがでしょうか。学会誌としてのレベルを維持すると同時に、専門外の方々にも関心を持っていただけるような紙面構成にしていきたいと編集委員会では考えています。ご意見、ご感想など、ありましたら是非事務局までお寄せ下さい。(第28号編集責任者 大久保伸子)

フランス語研究が出来る大学・大学院案内

このコーナーでは、従来の文学部系の仏語仏文学専攻以外の枠組みでフランス語研究が出来る大学・大学院を中心に、紹介して行きたいと考えています。情報をお寄せ下さい。

~~~~~

### ☆京都大学総合人間学部、大学院人間・環境学研究科

京都大学総合人間学部は、平成5年4月に旧教養部を改組して発足しました。人間学科・国際文化学科・基礎科学科・自然環境学科の4学科に分かれていて、このうち国際文化学科の言語文化論講座のなかに「言語記号論分野」があり、この学部での言語研究の中心になっています。従来のように英語英文学、仏語仏文学のような言語別の学科制度ではなく、横断的な組織になっているので、この講座では英語学・ドイツ語学・フランス語学のいずれも学ぶことができます。フランス語学のスタッフは大木 充と東郷雄二の2人です。大木の研究領域は機能的統語論・イントネーション・身振り言語など幅広く、東郷は機能的統語論・言語と認知機能・話言葉のフランス語などを研究しています。スタッフにはこの他に水光雅則(英語学)、西本美彦(独語学)がいます。平成5年に第1期の新生を迎えたばかりの新しい学部ですが、将来は機能的言語学の研究者を育てていきたいと考えています。

大学院人間・環境学研究科は、平成3年に発足した京都大学の独立大学院です。このなかの「環境情報認知論講座」に言語系の科目が集まっていて、ここでフランス語学の大学院レベルの教育・研究をしています。言語系のスタッフは上記の東郷・大木に加えて、山梨正明(英語学・認知言語学)、北山 忍(言語心理学)の4名です。この講座の特徴は「認知」というキーワードのもとに、大脳生理学・心理学・言語学の研究者が集まっていることで、言語と認知・知覚・情報・行動・脳神経医学との関係などを学際的に研究する環境が整っている点です。ただし学際的な研究方法を強制されるわけではありませんので、従来の伝統的なフランス語学の研究もすることができます。2月と10月と年に2回入学試験を行っており、博士課程からの編入学もできます。問い合わせは 京都市左京区吉田近衛町 京都大学大学院人間・環境学研究科事務室まで。(東郷 雄二)

~~~~~

名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻

名古屋大学では1991年に全学の文系学部を母体とする独立大学院として国際開発研究科(院生の総定員が230名という巨大な研究科)が発足し、その第3専攻として93年度に国際コミュニケーション専攻が開設されました。国際コミュニケーション専攻は、コミュニケーションにまつわる種々の問題を、文化・言語・情報などの面から研究することを目的とし、スタッフの半数は広い意味での言語学の研究者です。専攻は五つの講座に分かれていますが、講座間の垣根は低く、自らの目的・興味に従って研究のプログラムを自由に決定することが出来ます。フランス語学が専門の教員は滝澤隆幸と藤村逸子の2名で、いずれも「言語教育科学講座」に属しています。滝澤の研究分野は、音声学・社会言語学、藤村は日仏比較対照の観点から両言語の統語構造を研究しています。94年度は文学部仏文科出身者が3名、国際コミュニケーション専攻に入学しました。募集要項の配布は6月末、修士過程の入学試験は9月上旬です。博士過程

は95年4月に開設の予定。問い合わせは、名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院国際開発
研究科事務室まで。 (藤村逸子)

研究会・読書会案内

<フランス言語学を一緒に勉強する会>からのご案内

毎月原則として第2土曜日3時~6時に慶応大学(三田)で集まりを開いています。今後の
予定は、6月18日 林 義(愛知県立大学)「pouvoirと話者の心的態度」、7月16日
住井清高(筑波大学・院)「題未定」、9月 秋 尚江(東京外語大・院)「直接目的語のle
, en, caの指示について」、10月 阿部宏(東北大学)「plus ou moinsにおける「程度」と「選
択」」、11月12日 塩田明子(東京外語大・院)「半過去をめぐって」、12月(発表者
未定)。9月以外は慶応大学三田旧図書館小会議室(2F)、9月は慶応大学三田西新棟会議
室(3F)。気軽な情報交換、耳学問の場として、世代を問わずにご参加下さい。話をして下
さる方を募集しています。問い合わせは世話人(川口順二、藤田知子)までどうぞ。

<関西フランス語学研究会>

毎月1回程度土曜日の午後に、フランス語学に興味を持つものが集まり例会を開いています。
学生・院生・教員を問わず、気軽にご参加下さい。例会の案内を希望される方は大阪市立大学
文学部仏文教室 福島祥行(〒558大阪市住吉区杉本町3-3-138)までお尋ね下さい。

(紹介記事の掲載を希望されるグループは、事務局または編集委員までお申し出下さい)

★特別例会講演者インタビュー

次回から、出来れば、特別例会で講演をお願いした来日フランス人言語学者のインタビュー
を掲載する予定です。

★ニューズレター1号2号担当者より

言い出しっぺとしてニューズレターの1号と2号を担当した訳ですが、編集委員の間でも色
々な考え方があるので、最大公約数的なところを取ると実用的な有用性というのは同じでも、
どうしても没个性的というか事務的な紙面になりがちです。そこで各担当者をお願いしてそれ
ぞれの所感を書いて貰ったりして、親しみの持てる紙面にするように努力したつもりです。親
しみの持てる紙面ということだったら、いっそのこと東京方言ではなく担当者の母語である関
西弁でニューズレターを書くという手もあったのですが、学会発表ならともかくニューズレタ
ーでそんなことをすると、それでなくとも”いらんこと”を書きがちな担当者への風当たりがま
すますきつくなるので、”早い目に”そのような馬鹿な考えは捨てました。冗談はともかく、
今後とも担当者は変わっても、単なるお知らせだけに終わらないニューズレターに育って欲し
いと思います。(春木 仁孝)

★編集後記

さきの第1号については、幸い概ね好意的な反応を頂きました。今後とも、実際の業務に携
わっている人達の生の声を交えながら、当学会の動きや予定をお伝えしていき、このニューズ
レターが、編集委員会と会員の皆様の間を(出来れば相互的に)つなぐ窓口となるよう、編集
委員会としても希望しています。知りたいことや、ご要望などがありましたら、御遠慮なく編
集委員までお知らせ下さい。(H.Y.)